

※ 解答は、《解答欄》に書きなさい。

ポイント

- ・ 目的に応じて必要な情報を読み取る。
- ・ 書き手のものの見方や考え方を捉え、自分のものの見方や考え方を広くする。

木村さんは、次の **A**、**B** の文章を読んだあと、**C** の作文を書きました。

A

サマーキャンプで、テントにカナブンが入っていたときの事です。海野さんがカナブンの「カ」を高く発音して、「カナブンが出たー」と喜びました。このとき、わたしと林さんは、一しゅん「えっ、何のこと？」と顔を見合わせました。「カ」も「ナ」も同じ高さで発音するものにとらえていたわたしは、「カ、ナ、ブ、ン」という呼び名とカナブンという虫が結びつかなかったのです。わたしは、同音の言葉でも、①アクセントが異なれば、まったく別の物に聞こえることを実感しました。

家に帰って調べてみたところ、カナブンの発音は、「カ」が高かったり、「ナ」が高かったり、すべて同じ高さだったり、地域によってまちまちだということが分かりました。

B

「四十雀（シジユウカラ）」という鳥がいる。「雀」は、一字だと「スズメ」と読み、「小雀（コカラ）」「山雀（ヤマカラ）」のように、小鳥の名によく使われる。「小雀」の「小」はその大きさから、「山雀」の「山」はその生息地から付けられたのであろうと想像できるが、はたして四十雀の「四十」にはどんな意味があるのか。

調べてみると、鳴き声が「シイシイカラ」と聞こえるため、シジユウカラの名が付いたという説に行き当たった。もしこの説が正しければ、「四十」という漢字は、「シジユウ」とさえ読めればよいわけで、大して意味をもたないことになる。

C

百科事典に「仏法僧」という言葉があった。熱心に修行する僧侶のことかと思いきや、なんとツツポウソウは鳥だった。夜、「ツツ、ポウ、ソウ」と鳴くことから、この名が付いたそう。変わった鳴き声の鳥がいるものだと思っただが、よく考えてみれば、鳥の鳴き声はバラエティーに富んでいる。「コケコッコ」にして、「ホーホケキョ」にして、「ワン、ワン」や「ニャー、ニャー」のように単純ではない。ただ、特徴のある鳴き声そのまま名前になっているケースはめずらしい。

さらに興味深い話がある。実は、ツツポウソウは、「ツツ、ポウ、ソウ」とは鳴かないらしい。るり色の胴体に赤みがかつたオレンジのくちばしをもつこの鳥は、昼間、「ゲツ、ゲツ、ゲツ」と鳴き、夜、森の中から聞こえてくる「ツツ、ポウ、ソウ」は、フクロウの仲間、コノバズクの鳴き声だというのだ。なんともややこしい話だが、昭和の初めに②この事実が判明するまで、人々は、「ツツ、ポウ、ソウ」の声の主は、オレンジのくちばしをもつツツポウソウだと③思いこんでいたそうだ。

同じ事典に「法師蟬」とあった。これは、ツクツクボウシのことだとすぐに分かった。「法師蟬」の名が鳴き声に由来しているのであれば、「法師」は、読み方を最優先して選ばれたことになる。そう考えると、このセミの漢字表記を決めるとき、有力者の④鶴の一声によって、「⑤（ ）」が「奉仕」と表されていたとしてもおかしくはなかつたらう。

シート 25 正答例

- 1 ア
- 2 読み方を最優先して選ばれた
- 3 (例) 「フッ、ポウ、ソウ」と鳴く鳥の正体はコノハズクだとしつこと (29 字)
- 4 (例) 「カ」も「ナ」も同じ高で発音するとしつこと (22 字)
- 5 (1) かめ (2) うぐいす (3) なまみ
- 6 法師